米欧亜回覧

第５４号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集
広報メディア委員会

四月二十八日の全体例会は新趣向、「昴の人・谷村新司氏」を招いて

四月の全体例会は二十八日の夜、一部（総会）、二部の構成で開催される。

今回は異色のゲスト谷村新司氏を招聘し「宇宙・文明・人」をテーマに語ってもらう。谷村氏は、「昴」や「いい日旅立ち」のシンガー・ソングライターとして著名だが、コンサートでの語りが大変魅力的な事でも知られる。それは、いくつかのエッセイにもなり、今回は小説「昴」にもなった。そこに流れる宇宙的な思想と人間を愛するココロは一貫しており、当会の模索するグローバルジャパンの思想やＮＨＫ大河ドラマの「天地人」にも通じるものがある。

老若男女を問わず、また谷村世代の還暦前後のみなさんに多数の参加を期待している。

１３０人が参加した新年懇親例会（1月16日）

新年例会は「スウェーデン」テーマで盛会！

本年の新年懇親例会は、一月十六日（金）、日本プレスセンター十階のレストラン・アラスカで、百三十名が参集して行われた。

本会の新年例会は毎年、岩倉使節団が訪れた国々を巡回する形で行なっており、本年はスウェーデンがテーマとなった。

当日は駐日ノレーン大使ご夫妻、元駐ウェーデン大使の藤井威氏、大塚清一郎氏も迎え、音楽や料理、隠し芸の披露など多彩な趣向によって、大盛会のうちに終わった。

（詳細は二・三頁）

国際シンポジウム「世界の中の日本の役割を考える」の記録、出版！

本会の創立十周年を記念した国際シンポジウムは、二〇〇六年十一月二十三日から三日間、内外から多彩な講師を招いて、国際文化会館と学術総合センターを会場に行われた。

そのシンポジウムの記録がようやく三月末、「世界の中の日本の役割を考える―岩倉使節団を出発点として」の表題で、慶應義塾大学出版会から上梓された。価格は二千八百円（税別）、会員は二割引で購入できる。

（詳細は三頁）

創立十三年を迎え、深化し、拡大する部会活動

創立以来、百二十回を数える実記を読む会を始めとする各部会活動の積み重ねは、当会企画あるいは編集の出版物の実現を側面から支えてきた。

現在は、実記を読む会の番外編「高田ゼミ」をはじめ、会員による質の高い資料や論稿が発表されるようになり、個別テーマが深く掘り下げられている。一方、近現代に視野を広げた、歴史部会「岩波新書の近現代シリーズ読書会」も好評であり、「世界の中の日本を考える」グローバルジャパン研究会も会を重ねている。部会に参加していない会員にもぜひ関心をもっていただきたい。

（詳細は四・五頁）

今こそ「明治創業の精神」に学ぼう！

泉　三郎

迷走する日本、いま、その日本で一番求められているものは何か。

日本の長期的なヴィジョンであり、その基本になる思想であり、その実現のための具体的な政策ではないのか。しかし、自民党も民主党も明確な哲学やヴィジョンを示していない。あるのは当面の「景気対策」であり、対症療法的な短期的政策のみで、長期的な見通しや政策は残念ながら見あたらない。これでは、総選挙をやっても、とりわけ若い世代に投票したい党がないといわれても仕方がない。日本人を納得させ奮い立たせるようなヴィジョンはないのか。それがないのが日本の不幸である。

現在の世界的な大変化は「百年に一度」というけれど、日本にとっては「百五十年に一度」の文明的スケールの大変化だと思う。それはつまり、幕末維新以降日本が追いかけてきた西洋的近代化路線の変更を余儀なくされる大地殻変動だからという意味である。

となれば、私たちは今こそ、明治維新の時点まで戻り、「西洋的近代化」の原点に還ってゼロから考え直さなければならない。そこにあるのは、維新をやり遂げてきた先人たちの「気概」と「思想」である。佐久間象山、横井小楠、坂本龍馬、西郷隆盛、福沢諭吉らの言葉をもう一度噛みしめてみよう。

佐久間は「東洋の道徳・西洋の芸術」といい、横井は「道義国家」を唱え、龍馬は「通商国家」を、西郷は「敬天愛人」を、福沢は「独立自尊」を掲げた。

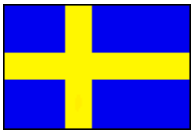
久米邦武も「米欧回覧実記」の中で、政治の目的についてこう述べている。

「政治ノ務ムヘキハ、国中ノ人民、ミナ生業ニ勉励シ、自主ヲ遂ケ、交際ニ礼アリ、信アリテ、百需ノ利ヲ開キ、外ハ国威ヲ屈セス、内ハ国安ヲ保シ、太平ノ境ニ進ムコソ務ムヘキ本領ナリ」

政治は何をしなければならないか、この簡潔な文章はそれを明快に提示している。いまこそ我々は「明治創業の精神」に学びなおすべきだと思う。

2009年 新年懇親例会

スウェーデンをテーマに 百三十人の参加を得て大盛会



二〇〇九年新年懇親例会は、一月十六日（金）十八時三十分～二十時三十分、スウェーデン国をテーマに、窓一杯に日比谷公園の夜景がひろがるレストラン・アラスカにおいて開催された。

昨年秋、会の企画をしていた折に、二〇〇八年度のノーベル賞を日本人四名が受賞との快挙が発表され、また社会的には高福祉を達成したスウェーデン型社会が注目されていることもあって、大変時宜をえた催であったといえよう。

会は泉代表の挨拶の後、ノレーン駐日スウェーデン大使のスピーチと乾杯、次いで元駐スウェーデン大使の藤井威氏のスピーチがあり、引き続き食事・歓談に移った（両大使のご挨拶要旨は別掲）。

来賓には、両大使のほか、スウェーデン大使館からは、大使夫人のグラジーナ様、文化担当参事官、アネット・マスイ様、大使秘書の岡田真美代様、前スウェーデン大使の大塚清一郎様をお招きし華やかな会となった。

なお、今回の食事は、大使のご好意でスウェーデン料理（鰊、ジャガイモなどの料理）三品を大使館シェフヨーナス・グスタフソンさんのサービスで提供していただき、スカンディナビア風味を楽しむことができた。

歓談の後、音楽の部ではステーンハンマル友の会の和田記代さん（ピアノ）、藤原歌劇団の向野由美子さん（メゾソプラノ）による演奏で、プログラムはスウェーデンを代表する作曲家ステーンハンマル、ペッテション＝ベルエルの作品から、「ニルスやピッピの童話の世界」のような詩情豊かな歌曲を中心に、オペラのアリアなどを堪能し、日本語の翻訳字幕が壁一面に映る演出もあって、和やかな心地よいコンサートになった。

また大塚清一郎元大使は、ギターを手にスウェーデンの十八世紀の詩人、カール・ミカエル・ベルマンの歌をスウェーデン語で披露され、ノレーン大使も飛び入りで加わり、やんやの喝采を浴びた。因みに曲目は「酒飲みの歌」。

また、今回はスウェーデン社会研究所所長の須永昌博氏に大変お世話になった。同会会員に本会を紹介してくださり、約三十名の方々がご出席、当会会員との懇談、交流で会を盛り上げていただいた。須永所長のすばらしいスピーチ（英語）ともども厚く御礼を申し述べたい。

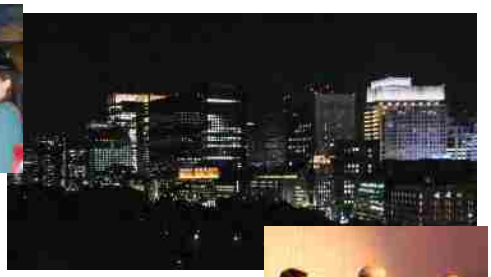
司会は、前半を山田、後半を近藤が担当した。参会者は近年にない盛会で百三十名、

ノレーン駐日スウェーデン大使ご夫妻

元駐スウェーデン大使
藤井威氏

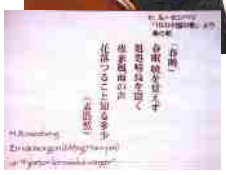
新年の挨拶をする
泉三郎代表

大塚清一郎元スウェーデン大使とノレーン駐日大使の合唱



素晴らしい日比谷の夜景を背景にして歓談

多数の参加者で
受付も大忙し



和田記代さん（ピアノ）と向野由美子さん（メゾソプラノ）の演奏と翻訳字幕

大使館シェフのヨーナス・グスタフソンさん（右）のスウェーデン料理も大好評

三人の大使をはじめ多くの方が最後まで会を楽しんでくださり、好評のうちに閉会となった。

【ノレーン駐日大使のスピーチ要旨】

先ずは流暢な日本語で新年のご挨拶。その後は英語で、「一八六八年の明治維新とともに日本とスウェーデンの外交関係が樹立された。岩倉使節団は一八七三年四月二十四日にストックホルム到着、翌日国王オスカーⅡ世に謁見した。四月二十六日から、造船、繊維などの工場、学校を見学、また新鋭のマッチ工場には興味を持ったようで、一行の一人が、服の袖を原料液の樽の中に浸しサンプルを採取したようだ」とのエピソードを披露された。ユーモアの中にも、使節団の好奇心、学習意欲が如何に旺盛なものであったかを紹介された。

乾杯の発声は「四名の日本人のノーベル賞受賞を祝い、両国の友好関係がますます発展することを祈念して杯を上げたいと思います。スコール！」。

スウェーデン社会研究所
須永昌博 所長

【藤井元駐スウェーデン大使のスピーチ要旨】

岩倉使節団は、物事の本質・真実を見ようとしたミッションであり、訪問国の良いところを学び、日本の近代化に役立てようとしたと思う。

また、天皇陛下も皇族の方々も、外国訪問の際に「実記」を読んでゆかれると伺っている。「実記」を読むことは、（明治の）原点に立ち返り、訪問国を知るうえで大切なものは何かを教えてくれる。

スウェーデンは福祉の国としてすばらしいだけではなく、過去を大切に、美しく保存し、近代の中にあってもよい街として維持し、子孫に残そうと努力している国だ。本日はこのような会にお招きいただき感謝しております。

（文責）山田哲司
（写真）橋本吉信

司会のお二人
前半・山田哲司氏（右）
後半・近藤義彦氏（左）

創立十周年記念・国際シンポジウム報告書
慶應義塾大学出版会から出版

二〇〇六年開催の当会創立十周年記念・国際シンポジウムの報告書（米欧亜回覧の会編）が、四月十日に発刊される。

タイトルは**「世界の中の日本の役割を考える―岩倉使節団を出発点として」**であり、韓国、中国、インド、マレーシア、インドネシアなどアジアからの論者の参加が特色でもある。

主要な目次は、

第一部「世界の中の日本の役割を考える――近代西洋文明を超えるもの」
第二部「岩倉使節団は日本の近代化に如何にかかわったか」
第三部「日本近代化百三十年における成功と失敗」
第四部「グローバル社会における日本の役割とは何か」
第五部「パネルディスカッション」である。

「世界の中の日本の役割を考える―岩倉使節団を出発点として」
米欧亜回覧の会 編
慶応義塾大学出版会 発行

A5判／並製／296頁
初版年月日：2009/04/10
ISBN：978-4-7664-1565-0
定価：2,800円＋税

メディア広報委員会
アンケートご協力ありがとうございました

前号ニュースに同封した、メールやインターネットなどの利用状況のアンケート結果について報告する。

返送者（三十五名）の九割がメールを利用し、しかも多くの人がほぼ毎日利用し、インターネットの利用も多い。パソコンに習熟していない会員が返送しなかった可能性はあるが、日常的に利用している会員は多く、会の情報伝達の補完手段として活用していきたい。但し、当会のメーリングリスト（登録者全員に同報メールが送信でき、事務局から催し案内などのメールが届くサービス）についての認識が曖昧な人も多い。また、新たな登録許諾者も十三名いて、登録推進と同時にリストの再整備が必要であるが、事務局体制が整わず、実現にはもう少し時間を要するのが現状である。

アンケートでは、連絡だけだはなく、パソコンで作成したデータや文書（レポート）などの送付手段としてメールに添付する方法の利用状況の設問もある。ＰＤＦやアクロバットリーダーなどの馴染みのない文言があって、回答に戸惑った会員が多くいたようである。この設問の趣旨は、当会には会員が作成した質の高い資料や研究報告書が多く存在するが、当該部会などに参加していない会員にも閲読の機会を提供する一つの手段としてメールなどが利用できる状態にあるかを確かめることであったことをご理解いただきたい。（四頁に関連記事）

回答を全体的に判断して、ソフトやファイルの名前や形式を知らなくても、既に、それらを処理できるパソコン環境が整っている人が多いと推定している。当会の財産となる資料、レポートの蓄積・活用に関しては、来年度に予定しているホームページ・リニューアルでも検討していきたい。

（文責）中山進

【特集】部会活動の広がりと新たな試み

当会では、三月で第百二十七回となる実記を読む会を始めとして、多数の部会活動が行なわれている。最近の傾向の一つは中身が深くなっていること、もう一つは使節団に限定されない広く・新しい試みである。実記を読む会と歴史部会の部会報告を特集としてとりあげ、その一端を紹介する。

実記を読む会　会員による優れた資料

実記を読む会では、月例の会の他に、番外編として「高田ゼミ」もスタートした。また、読む会の中で、会員が作成した興味深い論稿や資料などが続々と提供されるようになってきた。

■番外編「高田ゼミ」

十一月二十六日、出席者十二名。報告は、小林富士雄、鵜飼直哉、堀江興の三氏。

高田誠二先生（11月26日）

（Ⅰ）小林氏は「米欧回覧実記における植物・森林の記述―付、実記とほぼ同時期の滞日欧米人による植物の記述」と題する大部の資料を用意、『実記』に記述の各国植物・森林の注目点を網羅的に説明、併せてツェンベリー、シーボルト等、数名の欧米人による植生観察記より摘出、熱心に説明された。この資料は、「回覧実記・項目別小事典」（植物・森林編）とも称しうる秀抜なもので、今後『実記』の他分野への貴重な参考例として高く評価される。その他、**「岩倉使節団と明治の日本林政」（注）**なる論稿も提供された。

（Ⅱ）鵜飼氏は予告編資料「米欧回覧実記・緯度と経度の言述」に、追加「巻別・場所別・緯度・経度、誤差一覧表」を用意、『実記』中の数値とグーグル・アースの数値との差異を一覧に供しながら、その背景の言述（理由）を問う。「実記には訪問先の主要都市の緯度と経度が、丹念に入っている」ので、興味本位でその数字を確認してみるうちに、『実記』の盲点であることがわかり、調べるにつれて疑問が沸きだした、という（詳細略）。

久米の使用した原資料の精度の差に由来する訳だろうが、アメリカ大陸各地での誤差が大きく、英、欧大陸においては、概して僅小、あるいは当時の鉄道網発達の差に由来するものか。鵜飼探偵の極めつけを待ちたい。

（Ⅲ）堀江氏は、久米邦武の人物像について所見を披瀝。「天の時、地の利、人の和」という「大きな輪」の中にあった人であると考える。…無駄口は利かず、自分が関心を持つことは追究を続け、…日々努力することを楽しんだ人と認められる。しかし、反面他人には冷淡なところが散見され、結果的に「一将功なり万骨枯る」ところがあったとする。例として堀江氏は、厖大な『実記』著述には、多数の協力者が存在するに相違ないが、「彼らの名前を挙げ謝辞を述べても良い筈だ」とする。別の意見も出て、結局『実記』が、「久米邦武編修」としている（久米邦武著ではない）ことが、久米の謝意を含むと解してはどうか、というところに落ち着いた。

なお、高田先生より三氏に対し、簡明直截なアドバイス・コメント・メモを頂いた。最後に、久米邦武撰「弘道館記念碑銘」全文（六百六十七文字）の訓み下ろしを桑名氏が試みて、今回の「高田ゼミ」を締め括った。

（文責）桑名正行

芳野氏（第125回・読む会）

■第百二十五回

一月八日開催。二〇〇九年の読む会は昨年から参加の芳野健二氏のリポーターから始まる。

ご存知の通り、『実記』はイタリアに入ると、初めて実業を離れて、歴史と美術の街の美しさに沈潜・耽溺する。芳野氏は、フィレンツェは、①小国、②加工貿易・通商国家、③文化（教育レベル）において日本との共通性を見る。この街の商家の家訓には、「利潤は勤労の価にて」として、「眠るな・怠けるな・今日できることは明日に延ばすな・自分の見たものしか、信用するな」がある。今のイタリアからみると意外の感がある。

芳野氏は、物事をミクロからマクロ、鳥瞰から虫瞰、ズームインからズームアウトで眺めることを勧める。この日は、新春放談をかねてと、ご自身で研究された「世界の言語樹」、「日本人・語の歴史的流れ図」（Current of Japanese Language & People）、「人類文明五千年を見る」、「鳥瞰図・日本・西洋との出会い」の労作を発表する。盛り沢山の内容であったので勿体ないと次回も連続講演のことになった。

（文責）小野博正

（注）この資料は、鵜飼氏によってＰＤＦ（図表や写真を含む書面でもメールで容易に送受信を可能にする軽量な画像ファイル）にされ、当会のメーリングリスト登録者にメール配信の試みがされている。

また、鵜飼氏は『実記』のデジタル化をすすめているほか、左記のようなご自身のレポート、資料をＰＤＦにして、一部の会員にメールで回覧されている。

『実記』のルートをたどり記述を検証する「実記を片手にサンフランシスコ」、「スウェーデンの地図」、そして、パソコンに登録されていない漢字の検索ソフトを使って「実記」に登場する難しい漢字のデジタル化に挑戦した「今昔文字鏡」。

ご希望の会員の方は事務局に問い合わせてみてください。メールあるいはＦＡＸなどで送付が可能です。

歴史部会
好評・岩波新書の近現代史シリーズ読書会

■第六回読書会

十一月十八日、参加者十七名。『アジア・太平洋戦争』（吉田裕著）、リポーターは藤田實氏。

「あの戦争」は、何のための戦争だったのだろうか。なぜ開戦を阻止できずに、長期化したのか。兵士や銃後の人びと、アジアの民衆は総力戦を如何に生き、死んでいったのか。

開戦前の日米交渉から開戦、そして無条件降伏にいたる五年間をたどる。藤田氏は、自らの戦争体験と、高校を卒業後、三十五年に留学渡米、その後、欧米・アジアの人々との交友経験を交えながら、この時代を語った。

日本の戦後が中々終わらないのは、責任の取り方の曖昧さにありそうだ。大東亜戦争、日中戦争、アジア・太平洋戦争の様々の呼称は、戦争目的の、「自存自衛」「大東亜新秩序」「大東亜共栄圏」と「東南アジアにおける重要戦略資源の軍隊による獲得」などの建前と本音の中にもみられる曖昧さにも通じる。米国通の山本五十六が、一年は何とか持たせましょうといって始まった、経済的に見ても無謀な戦争であった。

藤田實氏（第６回読書

最近の、田母神幕僚長の論文問題は、戦前の状況を再現しかけない、由々しき事態が危惧されて見逃せない。将来の若者たちのために、我々の時代に戦争責任問題に決着をつけておかなければならないというのがリポーターの感慨であった。

■第七回読書会

十二月十五日開催、参加者十七名。『大正デモクラシー』（成田龍一著）、リポーターは桑名正行氏。

偉大なる明治・昭和の狭間にあって、大正という時代もあったのね、という人さえいるほどに影が薄い。だが仔細に見れば大正時代は、激動の時代でもあった。大正天皇は確かに病弱ではあったが、漢詩と和歌の文芸では名を為した。では大正デモクラシーとは何か。著者は、一九〇五年の日露講和のポーツマス条約に対する国民の不満から起きた日比谷焼打ち事件から一九三〇年の満州事変までの四半世紀の時代を、帝国主義―ナショナリズム―植民地主義―モダニズムのキーワードで読み解く。大日本帝国の展開のもとでの社会運動、そして大衆社会化が進行した時代である。それは、風流韻事の江戸の文化をのこす明治前期の気風から、日清・日露の熱狂を経て、天皇帰一の国家教学が確立するまでのジョイント（関節）の時代とも位置づけられる。この時代は、韓国合併、対華二十一ヶ条要求、米騒動の狂乱、第一次世界大戦、それによる成金ブームが生んだ、現在の原型とも言うべき都市社会の、サラリーマン、デパート、カフェー、車社会の出現。映画、演劇、童話、童謡、新しい村などの文芸文化の開花。モガ、モボの発生。

この時期に、後の昭和の日本を戦争に駆り立てたターニング・ポイントがあるはずである。それを、リポーターの桑名氏は、①安易なシベリア出兵を試みたこと、②米騒動の前、石井・ランシング協定で、米国が〔日本国の支那における特殊の権益を有することを認める〕言葉を、経済的のみならず、政治的にも認められたと拡大解釈して、後の関東軍の暴走の端緒を作ってしまったこと、③その前にも、ポーツマス締結時の満鉄に関する、桂・ハリマン協定に小村寿太郎が反対していなければ、その後の米国の態度や関東軍の跳梁の歯止めになったかもしれないとの見方は、示唆的である。

大正デモクラシーは、どうやら今の日本のあり方にも通底する問題を提起している。

■第八回読書会

二月十六日開催、参加者十五名。『高度成長』（武田晴人著）リポーターは山田哲司氏。

高度成長期とは、朝鮮動乱の特需で戦後の復興から這い上がり、経済が軌道に乗り始め、保守合同で、自由民主党政権が成立、対抗野党の社会党が統一されて、二大政党のいわゆる五十五年体制が確立する一九五五年から、ドルショックを経て、安定成長に移行する一九七五年前後までと考えられる。この時代は、丁度読書会に参加したほとんどの方々が、何らかの立場で実体験した自分史の時代でもある。経済自立五ヵ年計画が五十五年に始まり、開銀による電力、海運、鉄鋼など基幹産業への重点的資金供給が始まる。その開銀に在籍して、経済成長の一翼を担ってこられた山田氏のリポーターは最適のキャストであった。

山田氏は、開銀理事でもあった下村治氏の経済成長理論を核にして、高度成長期の日本経済は世界史的な意義を持ち、生き甲斐と能力の発揮できた環境が成長を可能にしたと解説された。日米は縮小均衡から出発せよとの下村語録は、百年来の経済危機といういまこそ参考にならないか。政治的には、大平正芳の勤勉で、剛毅なぶれない生き方からこの時代を振り返った。それは、現在の人材薄き政治への嘆きにもつながる。

最後に、参加者全員に、この時代の自分史の追体験をしながらの、高度成長の意味と、思い入れを語ってもらった。

（文責）小野博正

【幹事会からのお知らせ】
会員の会費振込が四月になります

事務の効率化のために、個人ごとに異なっていた会費期間を年度（四月～三月）に統一します。

会費期間が残っている会員および途中入会の方に対しては、三ヶ月単位で調整した振込み用紙が送られます。したがって、最終決定は総会後となりますが、現在五千円の年会費は、六千円（三ヶ月千五百円）となりますのでご了承下さい。

実記を読む会報告

連絡　桑名 正行
Tel&Fax　03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

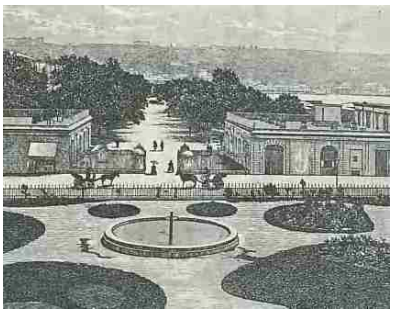
■第百二十四回

十二月十一日、出席者十二名。

第七十七巻ナポリノ記。

五月二十日、夕方着。久米は、新鮮な「鯛」を供せられ感激の言葉を残す。欧州周遊中は、塩魚と肉に辟易としていたらしい。当時のナポリは人口四十四万人の、イタリア第一の都市。十二年前の一八六一年にガルバルディによって、ブルボン家から開放され、イタリア王国になっていた。翌二十一日、博物館、ポンペイ、ヘルクラネウム遺跡を回覧する。

久米は、民情を「沃土之民惰」、乞食が多く、怠惰で、欧州一の貧民国で、後に見た上海並みとしているが、八十五年前にゲーテが「イタリア紀行」で、産品の豊富な土地で、人びとは遊んでいるように見えても、よく観察すると皆生活を楽しんでいると好意的にみている、その落差が面白い。『ナポリを見て死ね』は、久米もゲーテもその景観を等しく認めている。



ナポリ市海岸通りの風景
（『実記』）

■第百二十五回

一月八日。（五頁掲載）

■第百二十六回

二月十二日、芳野健二氏の特別講演「ザビエルから漱石まで―日本と西洋の出会い」。

一五四九年に日本を訪れたザビエルの「ザビエル書簡抄」から、ラフカディオ・ハーンまでの欧米人の日本観と、諭吉・漱石の西洋観までを通観する試み。芳野氏は、数十冊を読破して、印象に残った部分を、朗読して二時間半たっぷりと、往時の日本と西洋の出会いを語った。

西洋の日本人観は例えば―

ザビエル―善良にして悪心を懐かず、富より名誉を重んず。礼儀正しく、武器を珍重し、読み書きを能くす。よく人と交わり、知識を求め、人びとは哲人の生活を為す。

フロイス―日本人は感情を抑制し、控えめで、思慮深い。食事中は会話しないが、終わると歌ったり踊ったりする。酩酊は、日本では自慢の種になる。子供の素行は完璧で驚嘆する。女は夫に黙って外出も自由で、財産は妻も管理し、時に夫に高利で貸し付ける。牛は食わないが、犬を薬用に食べ、腐った魚を時に珍重する。

オルガンチー―全世界でもっとも賢明で、理性に従う天賦の才能を持つ、西洋人は日本人に比べるとはなはだ野蛮である。一方、彼の上司のバテレン・カブラルは、日本人ほど傲慢で、貪欲で、不安定で、偽装的な国民を見たことがない。心の中を打ち明けない。そして、家康の通訳もした、ロドリーゲスも、ヨーロッパ人に比し、天賦の才能に乏しく、徳を全うする能力に欠け、外見は謙虚で冷静だが、天性、優柔にして、動揺しやすく、情熱に欠けると多彩な日本人観があった。

その他にも、ペリー、ゴンチャロフ、オールコック、アーナスト・サトウ、イザベラ・バード、ワーグマン、ラフカディオ・ハーンの日本観も辿る。

日本人による西洋観は、天正、万延元年、文久二年使節団の記録や、ジェセフ彦自伝、そして、福沢諭吉の「世界国尽」、「文明論の概略」、「福翁自伝」と漱石の「ロンドン日記」を辿って語られた。まだ、語り足らぬ分が多く、次回以降に機会をみることになった。

（文責）小野博正

英訳実記を読む会報告

連絡　岩崎洋三
Tel &Fax　03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp

■第六十五回

十一月二十日、出席六名、第四十三章パリ市その二。

私が興味を持った三箇所について報告する。

副使をノートルダム寺院に案内したマーシャル氏について英訳者は、注十で彼の著書「INTERNATIONAL VANITIES」を紹介している。国会図書館で閲覧したところ、一八七五年五月一日パリで著者が署名をして鮫島尚信弁務使に進呈した原本だったのには驚いた。後日鮫島家から国会図書館に寄贈されたものらしい。

注十二では曾我物語の解説で「父の敵討ち」とすべき肝心な部分を何故か兄弟と「父との戦い」としているのはご愛嬌か。

第六十三回から、担当者一名で各一章を読み終える仕組みに変え、進度は速くなったが、担当者の負担がやや大きい。また議論が尽くせない嫌いもある。テキストの音読は出席者全員が分担している。

注十四は、「この記念碑を建てたのは、夏王朝の禹ではなく、秦の始皇帝である」と久米の記憶違いが指摘されているので、中国の古代史の勉強もさせて貰った。

（文責）三原　浩

■第六十六回

十二月十八日、出席八名、新年懇親例会のテーマ国のスウェーデンに備えて、六十八、六十九章の事前勉強を実施した。

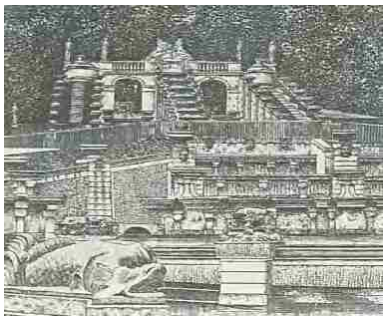
使節団は、四月二十三日にデンマーク・コペンハーゲンから対岸のマルモ港経由スウェーデンに入国して、列車でストックホルムに向かい、八日間滞在した。

実は、同国を訪問するか否か訪問直前まで固まらずにどたばたしていたことがEdstromの「The Iwakura Mission in Sweden」に描かれていて面白い。在外スウェーデン外交官の使節団に関する報告が、英国リバプール上陸一週間後まで無かったとか、使節団が最後まで訪問予定を固めなかったためだとか、あるいはどの程度の接待をしたら良いか決めかねていた等である。

滞在期間が短い割には、実記はスエーデンに二章を割当てており、中身が濃かったことが判る。ノーベルのダイナマイトの特許取得が一八六六年、エリクソンが軍艦を設

計する傍ら、イギリスのリバプール～マンチェスター間鉄道用の機関車コンペにNovelty号を出品し、採用はされなかったものの、最速で注目された、など、当時のスウェーデンは小国の割には想像以上に工業化が進んでいた。

例によって博物館、工場、海軍ドック、王宮、劇場、羅紗製造場、小学校、チーズ製造所などを忙しく見学、訪問したが、マッチ工場に格別の興味を示した。スウェーデンが安全マッチの先進国で、当時日本にも輸出されていたためらしい。（文責）岩崎 洋三



シャトー・サンクルーの廃墟
（『実記』）

■第六十七回

一月十五日、出席六名、第四十四章パリ市その三。

四日間に亘って訪問したペール・ラシェーズ墓地、ビュット・ショーモン公園、ワリコレ鉄工所、セーブル製陶所に関する英文十七頁に及ぶ参観記である。これを数名で順番に二時間半内で誤訳などの中身を精査しながら朗読するには、相当のスピードと事前準備が要る。大急ぎで朗読するため充分に吟味出来ない所もあったが、英語版注記と原文、口語版を参照しながら何とか終えた。その過程で特記に値すると思われた点を幾つか挙げる。

一．十九世紀末のフランス近現代史の勉強と共に、久米が屢々引用する中国古代史故事に伴う「恵而不費」「勧奨恵恤」等の熟語、成句及びそれらの英訳語を学習した。

二．内容は単なる観光案内ではなく英仏工芸技術発展の相違点又は労働権の確立など西欧の社会、政治、経済、技術各分野の比較文化論的な考察が展開されている。

三．難しい原文からの英訳については、サンクルーの古城の址「尽ク烏有トナリ」は…the chateau was gutted by fire…and simply been abandoned to the rooksと、日本語からの妙訳となり、また、原文中の「画龍ノ一睛」は英文の注記で関連する中国の故事を紹介。「最終仕上げ」＝the finishing touchの同義語と解説され、the pupil in the eye of a painted dragonと直訳されている。

（文責）岡部国雄

■第六十八回

二月十九日、出席五名、第四十五章パリ市その四。

パリ近郊のサンシール士官学校、モン・ヴァレリアン砲台、ヴァンセンヌ城を訪問し、教練、剣術、射撃、調馬などの訓練の様子を見て感想を述べている。屋内にある調馬場も珍しかったようだ。駐屯所のパンの製造工程を具さに見学し、詳述している。わが国でも稲の代わりに小麦粉を生産し輸出するよう提案している。また、オスマンの都市計画で整備されたパリ市の下水システムの見学をして構想の雄大さに感心する一方、排水路の中の穢気には閉口している。

久米の原文には漢語や比喩を使った言い回し表現が多い。英訳『実記』では英語圏の人に理解されるように、この部分は意訳されていることが多い。中には工夫された名訳があるが、原文のニュアンスを伝えようと、意味の通じる限り直訳されていることもある。この章でもパリの排水溝の説明で「軸ヲ砕ク雨中タリ」の表現がそのまま直訳されている。これでも激しい雨の意が伝わるかも知れないが、久米が言いたかったのは「車軸を流す（下す）」大雨のことであったろう。これも英文対比で読む面白さである。

（文責）小林 養丈

関西支部報告

連絡　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■DVDを見て・聞いて・語る会

大阪弥生会館にて、泉三郎氏を交えて、第一回・米国編（十一月二十二日）第二回・英国、仏蘭西編（一月二十四日）、第三回・独逸、欧州諸国、亜細亜編（三月七日）を三回シリーズで開催した。

NHK「その時歴史が動いた」の『岩倉使節団　世界一周の旅―明治の日本・世界と出会う』放映直後となった第二回は、三十二名の参加となった。一行が取り込詐欺にあい、各人の俸給や公的資金が被害にあったことも番組でとりあげられ、参加者の関心が大きかった。

DVDで、詐欺にあった使節団員について、現地留学生による狂歌の洒脱が参加者に一層の興味を掻き立て、使節団員の被害から明治初期の政府高官の俸給体系の考え方に関してまで話題が広がった。

フランスは農業中心の国であるが英国のような工業国に劣らず、パリの華やかさに見られるように国富の相当な蓄積が出来たことへの質問があったが、革命による農地解放で農業生産性が高まったことと以外にも、工芸品などの付加価値の高い軽工業で成果を挙げたためであるとの泉代表の説明があり、納得した。

また、少し前まで攘夷を唱えていた筈なのに、維新直後に多くの日本人が欧州各地に留学していたこと、しかも仏教界の人々まで広がっていたこと、パリでは旧幕臣の人材が図らずも集合して研鑽している状況を知り、奥行きの深さと柔軟性、開放性に驚いて、新ためて明治を見直したという感想もあった。

第三回の最後に、泉氏から、留学生を含むメンバーおよび海外で会った人々の静止画像（DVD資料編）で一人ずつ説明があった。人物プロフィールからの切り口で米欧亜回覧を観ることが非常に新鮮でかつ米欧回覧の意義がよく浮き彫りにされ、大いに興味を引いた。

（文責）難波康熙

DVDを見て・聞いて・語る会
（1月24日・大阪弥生会館）

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒112-0006 東京都文京区小日向 2-26-3
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2009年4月～6月の予定です

☆4月全体例会

日　時：4月28日（火）18：00～21：00
テーマ：第１部　18：00～18：50
ＮＰＯ法人米欧亜回覧の会・総会
第２部　19：00～21：00
谷村新司「宇宙・文明・人を語る」会
ゲスト：谷村新司氏（聞き手：泉三郎氏）
場　所：日本プレスセンタービル 10Ｆホール
会　費：2,500円（同伴者、紹介者も同額）

☆実記を読む会

日　時：4月 9日（木）18:30～21:00
5月14日（木）18:30～21:00
6月11日（木）18:30～21:00
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日　時：4月16日（木）18:30～21:00
5月21日（木）18:30～21:00
6月18日（木）18:30～21:00
場　所：国際文化会館
会　費：1,000円

☆歴史部会／近現代シリーズを読む会

〔第10回〕
日　時：4月20日（月）18:00～21:00
テーマ：『ポスト戦後社会』（吉見俊哉著）
報告者：永富邦雄氏

☆広報メディア委員会・第８回

日　時：4月14日（火）18:00～20:00
テーマ：当会の新展開に向けた広報活動について
場　所：ｵｸﾞﾙｳﾞｨ・ｱﾝﾄﾞ・ﾒｲｻﾞｰ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ（株）
会議室（恵比寿ｶﾞｰﾃﾞﾝﾌﾟﾚｲｽﾀﾜｰ25F）
＊広報、インターネットなどに興味のある方はぜひ参加してください（問合せ：事務局）

☆関西支部

日　時：5月23日（土）13:30～16:30
テーマ：例会
場　所：大阪弥生会館

編集後記

◇今回の部会報告は通常のスペースでは収容できない充実したものとなり、一部を四・五頁に特集として掲載しました。四月で創立十三年となる当会を支えてきたのが実記を読む会を始めとする部会活動の蓄積です。特集では、使節団や『実記』に関する研究の深化と同時に、関心領域を拡大させた質の高い部会活動の一端を紹介しました。

◇一月十四日のＮＨＫ「その時歴史が動いた」は、『岩倉使節団世界一周の旅―明治の日本・世界と出会う』で、使節団が全国放映されました。さらに、テーマを使節団そのものから、「女子留学生」（『明治の女子留学生』寺沢龍著・平凡社新書）や「洋行」（『洋行の時代』大久保喬樹著・中公新書）などに移し、その創始に果たした使節団の役割を捉え返す、読みやすい書籍も刊行されています。

◇四月の全体例会は、今までの質の高い活動の蓄積を基盤にしてさらに多くの人に呼びかける新趣向の試みとなります。ゲストは、昴の人・谷村新司氏、テーマは「宇宙・文明・人を語る」です。当会の新しい展開を考える幕開けに、多くの方々をお誘いください。（N）